

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

## ‘Meaningless’ (unique) morphemes

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-02-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宮島, 達夫, MIYAZIMA, Tatu メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/00001759">https://doi.org/10.15084/00001759</a>

# 無意味形態素

宮島達夫

## (1) 「無意味形態素」とはなにか

ビー玉      あわてふためく      昆虫

などという単語がある。これらは、単語全体としての意味や文法的性質の面からいえば、ごくふつうのことばで、特に目だつ点はない。しかし、これをその要素に分解すると、一般の合成語とはたいへんちがった点が出てくる。「玉」「あわて(る)」は独立の単語としてもつかわれるし、「虫」も「害虫」「寄生虫」のように語構成要素としてほかの合成語のなかにあらわれるから、その意味はよくわかるが、「ビー」「ふためく」「昆」は、独立の単語としても、ほかの合成語をつくる要素としても、あらわれることがないので、その意味はまったくわからない。(「昆布」ということばはあるが、これを意味的に「昆」と「布」という2つの要素にわけるとはむりで、この「昆」を「昆虫」の「昆」と同じ要素とみることはできない。) このように、それ自身では積極的な意味をもっておらず、つねにほかの特定の(有意味的な)要素と結びついてあらわれる要素が、ここでいう「無意味形態素」である。

念のためにことわっておきたいが、ここで「意味がない」「意味がわからない」「意味をもっていない」などというのは、現在の日本語としては、ということである。歴史的にさかのぼれば、これらの要素も意味をもっていた。「ビー」はガラスの意味の「ビードロ」の略であり、「ふためく」はフタフタ(バタバタ)とさわぎたてる意味の動詞であり、「昆」はそれだけで昆虫をあらわすことばだという。しかし、これはあくまで語源の問題であって、現代語の意味ではない。その点では、たとえば「なべ」の「な」や「へ」が現代語で意味をもっていないのと同じだ。ちがいは、「な」「へ」がともに無意味で分解できないのに対し、また「ガラス玉」が有意味の要素からなりたっていて、「ガラ

ス」のがわからぬ「玉」のがわからぬ分解できるのに対し、「ビー玉」では「玉」が有意味の要素として積極的にとりだせる結果、のこった無意味な要素としての「ビー」が消極的にとりだされるのだ、という点にある。

ある要素が意味をもっているかないかは、絶対的な差ではない。「ガラス」「玉」のように意味のあきらかなものと、「ビー」「な」「へ」のように意味をなくしたものとのあいだには、意味がうすく、あいまいで、有意味とも無意味ともきめにくいものがある。特定の結びつきしかもっていないものと、おおくの合成語中にあらわれるものとのあいだには、「はみだす、はみでる」「しちむずかしい、しち面倒な」など、ごくかぎられた結びつきにしか出てこない要素もある。だから、一般の形態素と無意味形態素とのあいだに厳密に線をひくことはできない。以下にあげる例も、無意味（唯一）形態素およびこれに近いもの、といった程度のものである。

このような特殊な形式が言語のなかにありうる根拠は、現実と直接むすびついているのが単語であってその要素でないという点にある。われわれは「ビー玉」の意味はしらなければならないが、「ビー」や「玉」の意味はしらなくても、この単語をつかうことはできるのだ。

さて、この種の無意味要素は、たぶん多くの言語にあって、その存在自体は否定できないが、これを理論的にどうとらえるかということになると、意見がわかる。フライシャーは、Himbeere（きいちご）、Nachtigall（ナイチンゲール）などの要素を「唯一形態素 (unikales Morphem)」とよぶのが適当だとしながら、このよび名がむじゅんしていることをみとめる。「というのは、形態素の特徴は、まさにそれがさまざまな形態素との結びつきのなかに同じ意味でくりかえしあらわれる、という点にあるのだから。しかし、歴史的な遺物をふくんだ言語体系の本質からして、術語の扱い方は柔軟でなければならない。」（文献8, p. 36）

言い方をかえると、こうなる。唯一形態素は意味をもっていない、つまりそれは「無意味形態素」だ、しかし、形態素とは意味をもった最小の言語形式のはずだから、この名まえはむじゅんしている。このむじゅんを解決するため、一方ではこれを形態素ではないとする主張、もう一方ではこれらもやはり意味

をもっているとする主張があらわれた。

マーチャンドは、これらの *dead morphemic elements* は能記と所記との結合という言語記号の本質的特徴をかいているから形態素とよぶべき理由はない、とする。「共時的な分析としていえることは、形態素的な要素 (M) 1つと形態素的でない要素 (N) 1つとをふくむ複合言語形式がある、ということだけである。」(文献3, p. 8) ステパノバも、これらは無意味で語根や接辞としてはたらしきもっていないから形態素ではない、とのべている。(文献4, p. 22)

「形態素」というのは、言語をわけていったどりつく最小の単位、という、単純明快で無内容なところがとりえの単位である。具体的な内容になれば、「よむ」の *yom* も *u* も同列に形態素だというように、雑然としている。だから、分析しつくした結果がまた形態素と無意味要素とにわかれるというのでは、「形態素」という単位をみとめる意味がうすくなってしまいうだろう。

これらの要素は「無意味」ではないから「形態素」とよんでさしつかえないとする考えは、ブルームフィールドによつてのべられている。この種の例としてよくひかれる *cranberry* (つるこけもも) の *cran-* という要素について、かれはいう。「それが恒常的な音声形式を持つ以上は、そしてまたその意味が、*cranberry* が *berry* の一定の種類であり、他のすべての種類と異なっているという限りにおいて、恒常的である以上は、我々は *cran-* もまた言語形式であるという。」(文献1, p. 208) これに近い考えはもっと明快な形で (文献6, p. 37) にまとめられている。すなわち、著者たちによれば、単語にはなくて形態素だけに特徴的な型の意味の1つに「区別の意味 (*differential meaning*)」がある。「区別の意味というのは、ある単語を、同じ形態素をふくむほかのすべての単語から区別するのに役だつ意味的成分である。」たとえば、「本だな」という単語における形態素「だな」は、この単語を、「本ばこ」「本立て」など形態素「本」をふくむ他の単語から区別し、逆に「本」は「本だな」を「神だな」「ちがいだな」などから区別する。おおくのばあい、語構成要素は対象の意味 (*denotational meaning*) と区別の意味とをあわせもっている。「しかし、*cranberry* の *cran-* のように、形態素になんらかの対象の意味があるとみ

とめることがむずかしい、または不可能なばあいもある。だが、それは (cranberry を blackberry や gooseberry とくらべればわかるように) この特殊なばあいには前面に出てくる区別的意味成分によって、あきらかに単語の意味と関係をもっているのだ。」

なお、無意味な要素ということからいえば、もっとも典型的なのは、「x線」「β線」「BCG」「IOC」などかもしれない。これらがなんの(対象的)意味ももっていないことはあきらかだが、「ユネスコ」が全体でわけられない1単位なのに対し、「IOC (アイ・オー・シー)」は3つの要素からなる。そして、「x線」を「光線」から、「BCG」を「BG」から区別するという点で、これらの要素も一定のはたらきをもっているのである。

## (2) 無意味形態素と唯一形態素

これまで、特定のむすびつきにしかあらわれない形態素と、意味のない形態素とは同じものであるかのようにいつてきた。この、唯一形態素＝無意味形態素 という等式はたいていのばあいにただしいが、いつもそうだとはいえない。

無意味であって唯一でない例としては、

さぎり さなか さまよう さゆ かぐろい かよわい

のような接頭的要素、伝統的な用語でいえば「発語」の類がある。(これらについて、国語辞典で「さ」は接辞、とだけ説明しているのは、この「さ」が無意味に近いことをいいたいのだろうが、接辞がみな無意味なわけではないのだから、この説明はよくない。) しいていえば、これらにも強調・美化などの意味をみとめることはできるが、「まんなか」「まっくろ」の「ま」などにくらべれば、その意味はごくよわく、ほとんどゼロといってよい。「発語」以外でも、

ひぐま ひづめ ひばら ひよわい あばら骨 あばらや さしかかる さしつかえる さしひく 太っちよ 横っちよ すみっこ はんこ

などは、唯一でない無意味形態素の例である。もっとも、無意味である以上、これらが同じ形態素だとも積極的にはいえないわけで、同音の、それぞれ別の

形態素だとする考えもありうる。(語源が同じかどうかは、このばあいにも証拠にはならない。)

なお、「x線」「BCG」なども、唯一でない無意味形態素の例にかぞえることができる。

唯一形態素は原則として無意味である。たとえば、「ビー玉」の「ビー」は、ガラスのことかもしれないが、また、小さい、透明な、おもちゃの、ころがる、あてる、などをあらわしていたことばかもしれない。いずれにしても、「ビー玉」全体としてビー玉をあらわすためにはさしつかえない。だから、ほかに「ビー～」という例がないと、その意味をきめることはむずかしい。ところが、あるばあいには、唯一例であっても、その意味がほぼあきらかなことがある。「おさんどん」「おてんとさま」は、この結合でしかあらわれないが、「お」「どん」「さま」をとりされば、「さん」が女中、「てんと」が太陽の意味であることは逆算できる。「ようか」も、「や」とは形がすっかりかわっているにもかかわらず、8の意味であることはわかる。「攘夷」「哺乳」などの意味も、全体の意味から「夷」「乳」の意味をひくことによって知りうる。

このような、いわば引き算による意味づけのほかに、唯一形態素には、いくつかの観点から、より直接的な意味づけがはたらくこともある。

- a) ぎ態語的な連想——うろおぼえ ごりおし じゃじゃ馬 だだっ広い もんどり  
打つ; 平ちゃら 妙ちきりん
- b) 類音への連想——うの毛(←うさぎ) しがみつく(←かむ) すべ公(←ずばら); あおみどろ(←水, どろ)
- c) 漢字の訓——頤使 狙上 拗音 歪曲; 界限 陥穽 恐慌 蛇蝎
- d) 外国語の知識——グローランプ サーチライト マタニティードレス ホームシ  
ック

これらによる意味づけがどの程度はたらくかは人によってまちまちで、ある人にとっては有意味だが他の人には無意味な要素だということもおこりうるだろう。

### (3) 無意味形態素の種類

#### a) 語根的なものゝ接辞的なもの

ここで「語根」というのは、それだけで単語となることのできる要素である。例をあげれば、

語構成要素	{	語根……塩, 水
		接辞……ま
合成語	{	複合語＝語根＋語根……塩水
		派生語＝語根＋接辞……ま水

接辞は、独立の単語にならない、という消極的な性質で語根と区別される。この点では（「うだつ」「どじ」など慣用句中の少数の例外をのぞいて）原則として単語にならない、という共通性があるので、無意味形態素も接辞に近い。しかし、一方、接辞はいくつもの派生語をつくる、つまり、いくつもの合成語のなかにくり返しあらわれる、という積極的な規定をもっている。語根も多くのばあい単独で単語になるだけでなく、合成語の要素になるはたらきをもっているが、これはいわば2次的なはたらきである。くり返しあらわれるものではなく、まして新しい合成語を積極的につくる能力をもっていない、という点で、無意味形態素は接辞とちがっている。

基本的なはたらきのちがいのほかに、接辞は語根にくらべて意味がうすく抽象的で、形はみじかい、という特徴をもっている。それで、この点を手がかりにして、無意味形態素を語根に準ずるものと接辞に準ずるものとにわけることができる。たとえば、「さぎり」「ひよわい」などは、1音節だという点からいっても、「きり」「よわい」に対する限定力がよわく、ちょっとしたニュアンスをつけくわえるにすぎないという点からいっても、接辞に準ずるものである。これに対し、「おがくず」「コッペパン」などは、長さも、くずやパンの具体的な種類をしめすようにする限定力のつよさも、接辞よりは語根に準ずるものである。

準ずる、というよりも、これらは語根や接辞そのものであって、語根のなかにも接辞のなかにも、唯一・無意味なものがあるのだといった方がただしいか

もしれない。いずれにしても、語根と接辞との区別はもともと相対的なもので、はっきりした線がひけるものではないのだから、無意味な要素についてこの2つに分けることは、いっそうむずかしい。

多くの無意味形態素は語根的だ。接辞的なもののうち、接頭的な類には、  
さぎり なかよしこよし か黒い たやすい だだっ広い どす黒い ひよわい  
などがある。接尾的なもののうち特徴的なのは、

はだえ おす えさ なすび 野ら はたけ 原っぱ すみっこ なかば はした  
夜わ

のように、この部分を切りすけても、ほぼ同じ、または近い意味をもつ単語（はだ・なす・野・原・すみ・なか・はし・夜）や造語要素（お牛・えづけ・田はた）として使われるグループだ。もっとも、これらが1音節であることも手つだってか、これらの無意味形態素は特に切りだしにくい。「はだえ」や「おす」は現代語としては分析不可能なまとまりをなすとか、これらは「はだ」「お」の異形態（allomorph）だとかいう見方もありうるだろう。

「はだ」と「はだえ」のような2重の表現が、なぜ現代の日本語にあるのか、という事情は、いちいちのばあいについて論じなければならない。しかし、「おす」「えさ」のように、もとの形「お」「え」が1音節のものにかぎっていえば、「す」「さ」は語形をひきのばすことによって安定させ、同音語との混同をふせぐ、というはたらきをしているとおもわれる。1音節の単語が（特に話しことばのなかでは）接尾的な要素をつけたすことによって安定した、ながい語形になる例は、ほかにもあるからだ。

子→子ども 背→背中 名→名前 荷→荷物 根→根っこ 葉→葉っぱ

「前」「物」などと漢字でかかれることがあっても、それらの「まえ」「もつ」などは、ほとんど意味をうしなっており、実質的には「おす」や「えさ」に近い。

このほか、名詞的または副詞的なことばにあらわれる接尾的な要素としては、

ねんねこ 朝っぱら さんざっぱら おいらく 汗みずく おためごかし 女だて  
らに これ見よがし



何せ いかが いくばく ～と言い条

などがある。「朝まだき」は「まだ」との関連をみとめれば「き」の部分が、みとめなければ「まだき」全体が、無意味形態素の例になる。

接頭・接尾のほかに、接中的とでもいうべき要素がある。

ぬるまゆ 年がら年中

かけずりまわる ぶった切る

あつぼったい はれぼったい 平べったい

最後の例で「ぼっ|た」「べっ|た」と切ったのは、「平たい」「ねむたい」「口はぼったい」などの「た」があるためだが、これらの「た」のもつ積極的なはたらき、したがってまたその共通性はきわめてうすいので、「ぼった」「べった」という要素をみとめるべきかもしれない。

唯一とはいえないが、

貧乏たらしい 未練たらしい 長たらしい にくたらしい

の「た」や、

ひねくる ほじくる

の「く」も接中的だ。また、もし

むいか

の「むい」を「む」の変種と考えずに「む+い」と分析し、

ぐれん隊

の「愚連」というあて字（語源俗解）を無視し、「ぐれ（る）」とだけ関連づけて「ぐれ+ん」と分析するならば、これらも接中的無意味形態素の例になる。もっとも、この「ん」を、さらに「赤ん坊」「いやん坊」「立ちん坊」や「四つんばい」の「ん」と同じものとして、2つの要素を結びつけるという積極的な役わりをはたしている、とみることもできる。

以上は接辞的要素が無意味形態素の例だったが、逆に、語根的要素が無意味形態素で、これに意味のあきらかな接辞のついた派生語の例も、すこしはある。たとえば、

おさんどん おたあさま おもうさま

は、この形でしか使われない。「おとうさん」「おかあさん」もこの形での使

い方がおおいが、「とうさん」「おとう」；「かあさん」「おっかあ」があるから、唯一形態素とはいえない。「おじいさん」「おばあさん」については、単独の「じい」「ばあ」も使われる。なお、「おじぎ」「おしめ」「おじや」「おつむ」「おなら」「おむつ」などの「お」は、あとにつづく要素と切りはなすことがむずかしいだろう。

無意味形態素に意味のあきらかな接尾語のついた例としては、また

あばら家 だふ屋 間屋 ばた屋 ようか(8日)

などがある。

さらに、語源的にはどうであっても、

ふつつか まっしぐら

の「ふ」「まっ」を「ふたしか」「ふまじめ」や「まっ白」「まっ正面」にそろえて切りだすことも、まったくできないわけではない。もしそうしたとすれば、あとにのこった語根的な部分「つつか」「しぐら」は、完全に意味不明な唯一形態素ということになる。

語根と接辞という分類は、漢語にはうまくあてはまらない。たとえば、「車」という要素は、独立の単語にならず「食堂車」「新型車」などと使われる点では接辞的だが、「車体」「車種」「電車」「新車」などではむしろ語根的だ。それで、たとえば「昆虫」「彗星」「福祉」「解剖」なども、語根的なのか接辞的なのか、いうのはむずかしい。

## b) 品詞

品詞別にみると、無意味形態素は名詞の構成要素にいちばん多くみられる。名詞のなかでも特に多いのは、後要素が上位概念をあらわし、無意味な前要素がこれを限定する、という形のものだ。たとえば、「カーキ色」「ひぐま」では、「色」「くま」がその所属をしめし、「カーキ」「ひ」はその種類を具体的に限定している。しかし、その限定のし方は「白くま」や「もも色」のように積極的に内容をしめすものではなく、ただ、「白くま」でも「月のわぐま」でもない、「もも色」でも「灰色」でもない、ということをしめすにすぎない。以下にこの種のものの例をあげる。

あぜくら うろおほえ うわごと えび茶 おがくず カービン銃 かしわ手

カタン糸 カルメやき くだもの ぐれん隊 クロスゲーム けん玉 ケント紙  
コールドゲーム コッペパン こより ごり押し ころがき さざ波 ざりがに  
じゃじゃ馬 しん粉 すきやき すけそうだら ずべ公 せきせいインコ せみく  
じら せんか紙 タコメーター だて巻き だぼはぜ ダムダム弾 たんこぶ ち  
やぶ台 ちよんまげ ツェツェばえ つつがむし 津波 つばな  Deng熱 でん  
ぐり返し どさまわり とどまつ ナップザック ニッパやし のたれ死に はえ  
なわ 波止場 ハトロン紙 バニシングクリーム ハモンドオルガン ビー玉 ひ  
づめ ヒューム管 ひよどり ふり べいごま へさき ボギー車 ポン柑 ま  
な板 まなづる みどり子 よまいごと リアス式 るつぽ レンタカー わくら  
ば

2字の漢語でも、つぎにあげるものはこれらと同じグループに属する。

陰路 嬰兒 冤罪 楷書 鴉音 蟻虫 颶風 狛下 頁岩 皓齒 嚙矢 洪水 閘  
門 梧桐 昆虫 棍棒 焜炉 賽銭 塹壕 麝香 驟雨 撞木 箴言 彗星 隧道  
碩学 楕円 駝鳥 甜菜 陛下 烽火 窯業 驟馬 膂力 驢馬

後要素が意味不明の名詞としては、

あおみどろ 朝ぼらけ 足駄 アジト 汗も 雨もよい オートバイ くちびる  
こいこく 竹みつ どくだみ にわたずみ はこせこ 半ドン 日なた 日より  
またぐら まちぼうけ 身じろぎ 耳たぶ ミルクセーキ むこがね 山かがし  
行くえ 湯たんぼ 夜なべ

があり、これに対応する2字の漢語には、

暗渠 外套 華僑 山窩 書肆 青鞵 短冊 茶托 白壁 飯盒 兵站

などがある。

マーチャンドによれば、英語では、cran-berry, holi-day, lin-seed, linch-pin,  
un-til のように、無意味形態素が前要素としてあらわれるのがふつうで、neck  
lace, heir-loom のように後要素としての例は少ないという。(文献3, p. 8) これ  
 は日本語でもおなじで、たとえば、「ミルクセーキ」つまり「ミルクに関係  
 のある何か」のように後要素が意味不明で全体としての所属がきまらない名づ  
 け方よりも、「コッペパン」つまり「何かの種類のパン」のように、具体的  
 にはどんなものかわからなくても、とにかく全体としての所属(パン)があきら  
 かな名づけ方の方が、まだしもわかりやすい。ただし、あとでのべるように、  
 品詞や意味によっては無意味形態素が後要素に多くみられることもある。ま

た接辞的なものについては、前にあげた例からもわかるように、前要素（接頭）の方が後要素（接尾）よりも少ないようだ。

2字の漢語名詞には、また意味の近い、または同類のものをあらわす字をかさねたものがある。

仕器 蔬菜 紐帯 萌芽 | 花卉 魚介 劍戟 股肱 草莽 福祉 賄賂

ただし、意味が近いとか同類だとかいうのは、いわば語源的な説明であって、「肱」や「賂」は現代語としては無意味要素である。それだけでなく、もう一方の「股」や「賄」にしても、「股関節」「収賄」などと使われはするものの、結びつきがかぎられている。そのため、単語全体としての意味もうすれ、完全に日常語になった「賄賂」などは、「ワイロ」とかな書きするのにふさわしい。

この種のくみたてのものは、和語には見あたらないが、前が後を限定するのではなく同資格の要素をならべたもの、という意味でなら

めりはり

をあげることができる。

状態をあらわす名詞ないしは形容動詞としては、後要素の意味不明なものがおおい。

悪たれ 浅はか 荒くれ うでっこき 大ざっぱ 大っぴら 大どか 大まか 食いで しぶちん しらふ 名うて なまはんか のんだくれ 蛮カラ 平ちゃら  
へんてこ やけっぱち やせぎす やせっぽち よいどれ

「うでっこき」と「扱く」、「名うて」と「打つ」、「やせっぽち」と「これっぽち」などに関連をみとめれば、これらはここからはぶかなければならない。

漢語でここに属するのは、つぎのような単語である。

旺盛 狷介 熾烈 聡明 莫大 | 暗澹 迂闊 混沌 静謐 清冽 白晳 悲愴  
不遲 明晰 流暢 猥褻

動詞のなかでおおいのは、一般の複合動詞とおなじく、2つの動詞語根がつづいて、前の要素が連用形のものである。ただし、

あわてふためく おいさらばえる おいぼれる おちぶれる だまりこくる ぬりたくる ねそべる ふきすさむ ふみしだく ほめそやす 見せびらかす 見とれる  
見はるかす やせさらばえる

などは、意味はわからなくても、形の上から後要素が動詞的成分であることはあきらかだが、前要素が無意味なものは、それが動詞的なものか名詞的または副詞的なものなのか、実はよくわからない。たとえば、

いきりたつ かなぐりすてる けしかける こびりつく さらけだす しがみつ  
そそりたつ でっちあげる ぶりかえす へばりつく むしゃぶりつく めりこむ  
 などは、前要素が動詞的なようにもみえるが、「いきる」「しがむ」などという動詞はないのだから、なんともいえない。「ぬきんでる」も、意味も動詞性もうしなつた要素と考えるべきだろう。

一方の要素が名詞的または副詞的なものとしては、つぎのような例がある。

<u>うろ</u> (おろ) <u>ぬく</u> <u>かいま見る</u> <u>しょっ</u>	<u>口ずさむ</u> <u>しょぼくれる</u> <u>手つどう</u>
<u>びく</u> <u>すっぱぬく</u> <u>ずばぬける</u> <u>せせら</u>	<u>横たえる</u> <u>横たわる</u> <u>悪びれる</u>
<u>わらう</u> <u>せっぱつまる</u> <u>そっくりかえる</u>	
<u>のっぴきならない</u> <u>ひれふす</u> <u>ほくそえ</u>	
<u>む</u> <u>もんどりうつ</u>	

「いなく」を「いな+なく」と分析すればこの類にはいるが、現代語ではムリだろうか。「あまつたれる」と「しょぼたれる」と「水がたれる」とは同じ形態素だろうか。

2字の漢語で、動作性の意味をもったものの例を以下にあげる。分類はここでむしろ語源的なものである。まず、両方とも動作的な要素のもの。

<u>蘊蓄</u> <u>嘔吐</u> <u>懊惱</u> <u>乖離</u> <u>呵責</u> <u>慷慨</u>	<u>圍繞</u> <u>演繹</u> <u>改竄</u> <u>開關</u> <u>解剖</u> <u>更迭</u>
<u>哄笑</u> <u>拷問</u> <u>褶曲</u> <u>呻吟</u> <u>斟酌</u> <u>闡明</u>	<u>困憊</u> <u>殺戮</u> <u>叱咤</u> <u>消耗</u> <u>炊爨</u> <u>切磋</u>
<u>傘捕</u> <u>佇立</u> <u>姦乱</u> <u>沐浴</u> <u>宥和</u>	<u>洗濯</u> <u>彈劾</u> <u>排泄</u> <u>破綻</u> <u>拔擢</u> <u>比較</u>
	<u>遊弋</u>

つぎに、後要素が動作的であつて、前要素はこれを副詞的に限定するもの。

<u>蝨集</u> <u>蠕動</u> <u>跛行</u>		<u>一揆</u> <u>希覯</u> <u>反覯</u>
-------------------------------	--	-------------------------------

漢語にはまた、前要素が動作、後要素がその対象をあらわすものがある。

<u>敲首</u> <u>刮目</u> <u>箝口</u> <u>拱手</u> <u>叩頭</u> <u>摟夷</u>		<u>分蘖</u> <u>容喙</u>
<u>哺乳</u>		

このほか、「する」とむすびついたものに

けみする なみする なんなんとする 沖する 燴じる

などがある。

形容詞には、まず後要素の「～ない」とむすびついたものがある。

あっけない えげつない がんぜない ぎごちない そっけない たわいない つ  
つがない ふがいない みっともない ゆくりなく よんどころない  
(心もとない 口さがない)

もっとも、これらがどの程度まで否定の「ない」と関係づけられるかは問題で、「えげつな(い)」「さがな(い)」などを分解できない1単位とした方がいいかもしれない。

このほか、前要素として

うずたかい きなくさい ちゃんちゃらおかしい

後要素として

あまたるい 丸まちい 見すばらしい 目まぐるしい

などがある。

副詞的なものには、

<u>あ</u> わ <u>よ</u> く <u>ば</u>	<u>し</u> ん <u>ね</u> り <u>む</u> つ <u>つ</u> り	<u>の</u> ん		<u>命</u> か <u>ら</u> が <u>ら</u>	<u>う</u> で <u>ず</u> く	<u>大</u> わ <u>ら</u> わ	<u>ね</u>
<u>べ</u> ん <u>だ</u> ら <u>り</u>	<u>も</u> は <u>や</u>	<u>沛</u> 然		<u>こ</u> そ <u>ぎ</u>	<u>ひ</u> と <u>し</u> お	<u>夜</u> も <u>す</u> が <u>ら</u>	<u>ろ</u> く
		<u>佛</u> 然		<u>す</u> っ <u>ば</u>			

があり、連体詞には

名だたる

がある。

#### (4) 慣用句特有語としての無意味形態素

大部分の無意味形態素は、以上あげてきたように、合成語の構成要素である。しかし、たまには、それ自身単語であるような無意味形態素もある。たとえば、「うだつがあがらない」という慣用句における「うだつ」は、まったく意味をうしなっている。これが建築用語からでたなどということは、専門的な語源知識にすぎない。そして、この形態素はこの慣用句のなかにしかあらわれない。「うだつもあがらず」「うだつはあがらなかつたが」のような表現もありうるだろうから、「が」とのむすびつきは唯一とはいえないが、「あがる」(しかも否定用法における)とのむすびつきは絶対的な条件である。

慣用句は全体として1つの意味的単位をなす。合成語において、問題なのは全体として(たとえば「ビー玉」)の意味であって、構成要素(たとえば、「ビー」)の意味ではないように、慣用句のばあいには、その構成要素である単語の意味がわからなくてもかまわないのである。

つぎに、このような慣用句の例をあげる。

あつけにとられる あられもない いくじがない うんともすんとも おくびにも  
ださない おだをあげる かたずをのむ くびすをかえす こげんにかかわる さ  
ばをよむ しのぎをけずる 如才がない だらしがない てぐすねをひく どじを  
ふむ とてつもない にちちもさちちもいかない にべもない ねたばを合わせる  
なんのへんてつもない 身の毛もよだつ めくじらをたてる もつけのさいわい  
やくたいもない ~にやぶさかでない らちがあかない れっきとした ろれつが  
まわらない

つぎのような類は単語とみるべきかもしれないが、形の上では慣用句的だ。

うの毛 こうのとおり とどのつまり はんの木; けんもほろろ; こけつまろびつ  
かててくわえて

なお、「くってかかると」「とってかえす」「やってくる」なども、「くう」「とる」「やる」との意味的なむすびつきをうしなっている。

さて、以上のような無意味な単語は慣用句に特有なものだが、逆に慣用句特有語がすべて無意味形態素だとはいえない。

生き馬の目をぬく 魚心あれば水心 開き耳をたてる 昔とつたきねづか 立て板  
に水 ぬけ目がない むなくそがわるい やり玉にあげる

などの単語は、これらの慣用句のなかでしか使われることはないが、無意味ではない。「生き馬」「立て板」の意味はあきらかだし、「むなくそ」「やり玉」は何だかわからないが、とにかく「むね」「やり」に関係があることはうたがない。この種のもは

九死に一生をうる 牛耳をとる 九仞の功を一簣にかく 万事休す 窮鳥ふところ  
に入る

など、漢語からはいくらでもひろうことができる。

## (5) 無意味化と有意味化

無意味形態素の一部には、はじめから無意味だったとっていいものもある

と思われる。ぎ態語的な「じゃじゃ馬」「妙ちきりん」や、外来語の「タコメーター」「シュークリーム」など。だが、それは原則としても意味をもっていったものが無意味化することによって成立する。しかし、また、大きな形式の一部分が有意味化することによって、のこりの部分が無意味形態素になる、という可能性もある。

これは、第一に、すでにある形式への類推、語源俗解によっておこる。「パセリ」「ポンズ」が「セリ」「す」の1種と解釈されたとき、あとにのこった「パ」「ポン」は無意味形態素になった。第二に、それは略語という形でもおこりうる。今のところ省略によって有意味化した「バイト」や「プロ」は、「アルバイト」や「プロフェッショナル」「プロダクション」などとは独立の形態素といえるだろう。しかし、この省略形がもっと優勢になれば、もとの形が逆に「アル+バイト」「プロ+フェッショナル」として、つまり「アル」「フェッショナル」などの無意味形態素をふくむものとして解釈されることもありうる。

一方、無意味形態素が有意味の単位になるプロセスにも、2つの型がある。第一の型はやはり語源俗解によっておこるものである。「朽ちおいしい→口おいしい」「道まよう→血まよう」「麻姑の手→孫の手」という変化の途中では、これらの「くち」「ち」「まご」が無意味だった段階があったかもしれない。これらは、すでにある同音の形式への類推、同化としての意味づけだが、まったくあたらしい意味をもった形式として成立する可能性もないことはない。ある人は、「シュークリーム」の「シュー」をこの菓子の外皮をさすものと理解して、「シューにクリームをいれて…」のように使うという（渡辺友左氏による）。これは同化によらない意味づけの例だ。

意味づけの第二の型は略語の形をとったものである。ある形式Aが、それだけで単語としても、また、A+上位概念 という形の合成語としても使われることがある。たとえば、「あばらぼね」は、また「あばら」という単独の形でもあらわれる。この種の例としては

いぐさ おしどり どうだんつつじ ひきがえる むくどり  
などがある。これら、古くからある和語のものについては、



(a) あばら →  $\left\{ \begin{array}{l} \text{あばら} \\ \text{あばらぼね} \end{array} \right\} \rightarrow \text{あばらぼね}$

という唯一（無意味）形態素成立の過程にあるものか、逆に

(b) あばらぼね →  $\left\{ \begin{array}{l} \text{あばら} \\ \text{あばらぼね} \end{array} \right\} \rightarrow \text{あばら}$

という略語の成立、それにとまらぬ無意味形態素の意味づけの過程にあるものか、きめることはむずかしい。一般的にはむしろ(a)の例がおおいだろう。しかし、外来語系のあたらしい無意味要素のばあいには、(b)の例とみられるものがすくなくない。

コッペパン ナパーム弾 ハترون紙 ハヤシライス フェリーボート プレザークート プロパンガス ベニヤ板 ライフル銃 リュックサック

など。「チキンライス」「カレーライス」が単に「チキン」「カレー」と略されるように、「ハヤシライス」も「ハヤシ」といわれる。これは、つまり、「ハヤシ」という無意味形態素が「ハヤシライス」全体にあたる意味をもつようになった、ということである。

#### (参考文献)

- (1) ブルームフィールド『言語』（三宅・日野訳 1962）
- (2) Nida, E. A. "Morphology" (1949)
- (3) Marchand, H. "Synchronic Analysis and Word-Formation" (Cahiers Ferdinand de Saussure 13, 1955)
- (4) Степанова, М. Д. "Структура слова и анализ по непосредственно составляющим"  
(Проблемы морфологического строя германских языков 1963)
- (5) Coates, W. A. "Meaning in Morphemes and Compound Lexical Units"  
(Proceedings of the Ninth International Congress of Linguists 1964)
- (6) Ginzburg, R. S. · Khidekel, S.S. · Knyazeva, G. Y. · Sankin, A. A.  
"A Course in Modern English Lexicology" (1966)
- (7) Степанова, М. Д. "Методы синхронного анализа лексики" (1968)
- (8) Fleischer, W. "Wortbildungslehre der deutschen Gegenwartssprache"  
(1969)